

日常利用と防災機能を有する海岸防災施設「命山」に関する研究

—静岡県袋井市に現存する「命山」の歴史変遷に着目して—

A Study on Coastal Disaster Prevention Facility "INOCHIYAMA" with Use and Disaster Prevention Functions

- Focus on Historical Transition of "INOCHIYAMA" in Fukuroi city of Shizuoka prefecture -

○土屋祐大¹, 岡田智秀², 勇崎大翔³*Yudai Tsuchiya¹, Tomohide Okada², Hiroto Yuzaki³

Abstract: The purpose of this study is to clarify the historical transition of the traditional coastal disaster prevention facility "INOCHIYAMA" which has both daily use and disaster prevention functions in Fukuroi City, Shizuoka Prefecture. As a result, this paper clarified the background of the development of "INOCHIYAMA" and the social background that spread to the region.

1. 研究目的; 2011年に発生した東北地方太平洋沖地震を契機に、わが国の海岸防災のあり方は従来よりも強固な防護施設が求められるようになったと同時に、背後の市街地にあつては津波避難施設を積極的に整備していく方針が示されるなど、防護と避難の両立を目指す取り組みが進みつつある。しかし、それらの諸施設が人々の生活空間に存在するならば、災害時のみを想定するだけでなく、日常の風景や利用にも寄与する整備形態が重要になると認識する。この点につき、静岡県袋井市に現存する「命山」は、防災機能と日常利用を併せ持つ伝統的な海岸防災施設であり、上述の観点において重要な施設と認識する。これまで筆者らの先行研究¹⁾では、「命山」の整備要件を導くため、「命山」造成時における住民参加のあり方および造成時の留意点について論考してきたが、原初期の「命山」の誕生の背景や、平成の「命山」の普及にまで発展した経緯は明らかにされていない。

そこで本研究では、「命山」の原初期から現在までの歴史変遷を捉え、「命山」の誕生の経緯や普及・発展に至る社会的要因を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法; 上記の目的を達成するため、本研究では表1に示す調査を実施した。

3. 結果および考察; 表2は「命山」が造成された袋井市の地形形成の変遷や災害履歴について整理したものである。以降は表2をもとに考察する。

(1) 治水初動期; 旧浅羽町(現袋井市)は、約6000年前から海岸低地として、高低差が少ない土地であった。それに相まって、縄文海進⁽¹⁾による名残の内海部や東西を蛇行して流れる原野谷川とその周辺の中小河川が高潮

などにより度々洪水を引き起こした(図1)。1600年代になると、度重なる風水害への対策として、徳川家康の命により、幕府の代官頭「伊奈忠次」が原野谷川とその西を流れる太田川を合流させ、新たな流路へと変更した。その結果、川筋に沿った新たな堤が形成され、旧浅羽町の防災の要となる「浅羽大囲堤」の原形が誕生した²⁾。

(2) 命山誕生期; 1680年の大型台風によって発生した「延宝の高潮」により、旧浅羽町は、住民約300人、民家6000軒余が流出という甚大な被害を受けた。また、浅羽大囲堤も約3.6km(全長14km)が破損するといった損害を被った。これを受け、その翌年には浅羽地区横須賀藩主であった「本多利長」による5万人余りの人手を投じた修復事業が始まり、農民たちは、悪政に苦しみつつも堤を復元させた³⁾。また、堤だけの津波・高潮対策に限界を感じ、地域共有の防災施設として、「大野」と「中新田」の村の中心に住民の高台避難場所となる「築山」が誕生した。さらに、近隣の東同笠地区にも個人宅内の敷地に「塚山」が7基造成され、地区内に浸透していった。その後、1698年と1699年には、大風雨による高潮災害から何度も住民の命を救ったことにより、「塚山」「築山」という呼び名から「命山」と呼ばれ土地に根付いた⁴⁾。

(3) 命山価値形成期; 1707年の宝永地震による土地の隆起で地形上の変化が生じ、上述した縄文海進により形成された内海部が干上がり、洪水件数は減少に転じた(図2)。しかし、1944年の東南海地震により、再び海岸部は津波被害に見舞われることになる⁵⁾。その際、東同笠村の個人宅内に「命山」を持つ家は、「命山」を避難所として利用し、難を逃れたという⁶⁾。その後、2007年になると、旧浅羽町の「命山」の発掘調査や古文書の分析が行われた結果、「命山」は、江戸期における防災上の重要史跡として、静岡県指定文化財に指定されるに至った⁷⁾。

(4) 命山普及期; 2011年の東北地方太平洋沖地震によ

表1 調査概要 [筆者作成]

文献調査	
実施日	2019年10月1日(火)~2019年10月25日(金)
調査対象地	静岡県袋井市内(旧浅羽町)
調査内容	静岡県袋井市(旧浅羽町)の歴史の変遷 ^{2)~8)}
	静岡県袋井市(旧浅羽町)の災害履歴 ^{2)~6)} 袋井市「命山」の変遷 ^{7)~8)}

1: 日大理工・学部・まち 2: 日大理工・教員・まち 3: 日大理工・院(前)・まち

る被災状況に衝撃を受けた浅羽南地区連合会は、翌月、浅羽地区の防災的な先人の知恵として、「平成の命山」の建設を中心とした津波対策の要望書を袋井市長に提出した。その後、「平成の命山」建設の実現に向けて、地域住民主体で5月～12月の計7ヵ月間で全15回にわたる事前協議「幸浦プロジェクト」が開催される。ここで、避難訓練を通じた地域の浸水域に対する避難の現況評価や、津波対策についての議論が行政機関との連携により実施され、2012年5月に「平成の湊命山整備事業」が正式に発表され、後に3基の命山造成事業が決定された⁸⁾。

4. まとめ；旧浅羽町の地形上の問題からくる洪水多発

表2 袋井市(旧浅羽町)の歴史の変遷および災害履歴 [参考文献^{2)~8)}をもとに筆者作成]

期	年代	袋井市(旧浅羽町)の防災上の歴史変遷	土地や命山に関する形成過程や概要
治水初期期	約6000年前	○海岸低地として地形に高低差が少ない土地であった ²⁾ (図1) ○浅羽地区を東西に流れる原野谷川が大きく蛇行し、洪水多発地帯となった ³⁾	・縄文海進の名残の潟湖(内海部)が原野谷川に入りこみ、原野谷川を中心とした周辺の中小河川が多数流れ込む ²⁾
	16世紀中頃	□旧原野谷川に現在も痕跡として残る「古堤」が造成された ²⁾ □13世紀頃から浅羽低地を東西に走る中畦堤の補修が実施された ²⁾ □湿地帯の悪水をはかせる排水路を整備 ²⁾	・戦国大名「今川氏真」による湿地帯の開発により、河川の治水や排水工事を基本とし、新田開発が進む ²⁾
	1604年(慶長9年)	□洪水や高潮から地区を守るため、低平地を東西に流れる原野谷川とその西側を流れる太田川を合流し、新たな川筋へと流路を変更した ²⁾ □新たな川筋に沿った堤が形成され、浅羽大囲堤の原形が形成された ²⁾	・1603年の関ヶ原の戦いにより、江戸幕府が開かれ、徳川家康の命による遠州総検地が行われ、幕府の代官頭「伊奈忠次」が一連の工事を担い、海岸平野における新田開発が本格化する ²⁾
命山誕生期	1680年(延宝8年)	■台風による「延宝の高潮」が発生 ²⁾ →高潮により、浅羽大囲堤が大破し、大きな損害を受ける ²⁾	・大型台風による高潮で浅羽地区は、老若男女300余人が死亡し、さらに民家6000軒余が流出という甚大な被害を受けた ³⁾ ・潮除堤も打ち越され、すべて引き潮で洗い取られる ²⁾ ・高潮は、海岸線から約2.5kmの横須賀城9尺(2.7m)に達し浅羽大囲堤も約3.6km(全長14km)が破損、13箇所が大破した ²⁾
	1681年(延宝9年)	□浅羽地区、横須賀藩主「本多利長」による浅羽大囲堤の修復 ²⁾ ●堤だけの津波・高潮対策に限界を感じ、津波・高潮避難施設として「大野命山」、「中新田命山」が誕生 ²⁾ ●近隣の東同笠地区にも個人宅内に「塚山」が7基築かれた ²⁾	・5万人余りの人出による大規模な修復事業を実施した ³⁾ →悪政に農民は困窮の中で作業は行われた ・堤内の村々は、「浅羽一万石」と称されるほどの水田地帯になる ³⁾ ・大野は頂上面積が広く、中新田は高さを採用した形態 ²⁾ ・上記起因として、両命山造成地区の土原料の確保のしやすさから大野は粘土、中新田は砂地からなる盛土工程である ²⁾
	1698年(元禄11年) 1699年(元禄12年)	■大雨による二度の高潮災害により、住民は命山に避難し、難を逃れた ⁴⁾	・高潮災害から何度も住民の命を救ったため、住民から「命山、命塚」と呼ばれるようになる ⁴⁾
	1707年(宝永4年)	○宝永地震によって潟湖 ²⁾ (内海部)が隆起し、洪水多発地帯の多くが干上がり現在の地形となる ²⁾ (図2)	・内海部が陸地として盛り上がった ³⁾
命山価値形成期	1944年(昭和19年)	■東南海地震が浅羽町を襲う ⁵⁾ →東同笠村の個人宅内にある命山は、実際に所有者家の避難場所となった ⁵⁾	・遠州灘で約1~2mの津波発生 ⁵⁾ ・個人宅内の命山は、この上に「ツカヤ」という小屋が建ち、中に鍋や釜程度のものが置いてあった ⁶⁾
	2007年(平成19年)	●「大野命山」、「中新田命山」が静岡県指定文化財に指定される ⁷⁾	・「浅羽町発掘調査」や「古文書」を通じ、江戸期における防災上重要な史跡として浅羽地区に今日まで残ることが高く評価された ³⁾
命山普及期	2011年(平成23年)	■東北地方太平洋沖地震が発生 ●地元住民から津波による市民の生命を守るため、先人の知恵を生かした「平成の命山」の建設の機運が高まる ⁸⁾ ●地域住民が主体となり、行政のサポートの下で全15回の前協議「幸浦プロジェクト」が開催される ⁸⁾ ●湊命山の整備を中心とした津波対策の実現が決まる ⁸⁾ ●袋井市長が平成の命山と津波避難タワーの整備を発表 ⁸⁾	・浅羽地区住民、連合会長ともに東北の被災状況に衝撃を受ける ⁸⁾ ・浅羽南地区連合会から袋井市長へ命山や津波避難タワー棟の建設に関する要望書を提出 ⁹⁾
	2012年(平成24年)	●袋井市長が平成の湊命山整備事業建設場所の決定を発表 ⁸⁾	・地域の浸水域に対する避難の現況評価や津波対策について議論 ⁸⁾ ・命山造成に関する整備方針や基本形状の検討 ⁹⁾

【凡例】○：土地の形成過程，□：防災に関する記述，■：旧浅羽町の災害履歴，●：命山に関する記述



図1 治水初期期における袋井市の原初期の堤の分布 [参考文献³⁾をもとに筆者作成]

の解決策として「命山」は誕生し、数多くの津波・高潮災害から住民の命を救ってきた。また、先人の知恵として地域に根付いてきた「命山」は、現在に至る功績が評価され、県の指定文化財への指定や、その後の「平成の命山」の普及へとつながっていったという実態を捉えた。

補注：(1) 縄文海進とは、約7000年前頃(縄文時代)に、現在に比べて海面が2.0~3.0m高くなり、日本列島の各地で海水が陸地奥深くへ浸入した現象 / (2) 潟湖とは、湾口に発達した砂州などにより外海と切り離されて生じた浅い湖
参考文献：1) 鴨路一・横内憲久・岡田智秀：「日常利用と防災機能を有する海岸防災施設造成のあり方に関する研究—命山 および「広村堤防」に着目して—」, 日本大学大学院理工学研究科修士論文, 2015 / 2) 静岡県袋井市歴史文化館：「遠州灘の高潮災害と二つの命山—命山の築造とその周辺—」, pp.2-12, 2013 / 3) 浅羽町史編さん委員会：「浅羽町史通史編」, 浅羽町, pp.459-475, 1998 / 4) 静岡県：「静岡県史別編2」自然災害誌, pp.325-331, 1996 / 5) 袋井市：「参考資料」, <http://www.city.fukuroi.shizuoka.jp/ldkrweb/Browse/material/files/group/42/sankousiyout.pdf> (最終閲覧日：2019.10.20) / 6) 中村羊一郎：「エッセー 静岡から考えた日本文化—お茶と鮭と命山—」, pp.218-219, 羽衣出版, 2002.8 / 7) 袋井市HP, https://www.city.fukuroi.shizuoka.jp/kurashi_tetsuzuki/bosai_anzen/bosai/1469529065422.html (最終閲覧日：2019.10.21) / 8) TOKAI N ETWORK CLUB：「津波から命を守る幸浦プロジェクト—平成の命山取り組みの軌跡—」, <http://www4.tokai.or.jp/asaba-minami-k/nami.pdf> (最終閲覧日：2019.10.21)

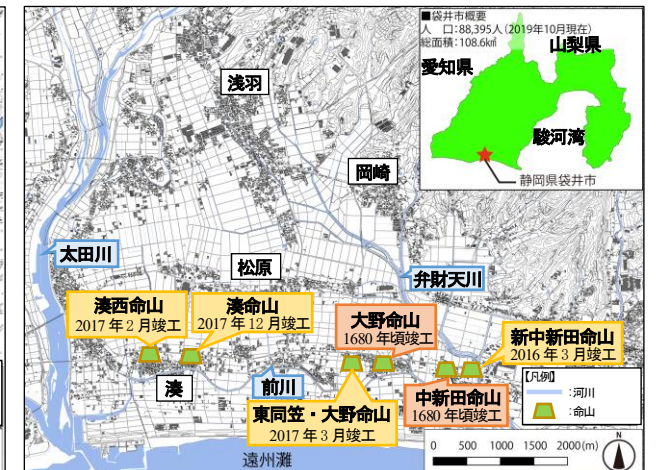


図2 現在(2020年)における袋井市の「命山」の分布 [参考文献⁵⁾をもとに筆者作成]